

「ゲーテ ファウスト」 第一部 (阿部 次郎訳)

昭和 22(1947)年 4 月 15 日初冊発行(国立書院) 定価 150 円

解説

1. ファウストの伝説及び文学

ゲーテの『ファウスト』は二重の意味に於いて代表的作品である。それがゲーテ其人の全生涯に伴って、彼の一生の芸術を代表していることは言うまでもないが、単にそれのみならず独逸民族の中に発生してその特質を反映しつつ成長してきたファウスト伝説も亦、この作に於いてその代表的結成に到達する。従ってそれは国民文学としても代表的地位に立っているのである。『ファウスト』の歴史的勢力を解釈せんと欲する者は、後の見地をも亦軽視してはならぬ。そうしてゲーテの『ファウスト』が、その結構に於いてもその精神に於いても、ファウスト伝説の中に浸りつつ其処から独自のものを創造する力を汲んで来ていることを考慮に容れないならば、人は作品内部の世界をも十分に理解し得ないであろう。

魔術の信仰は、全人類に渡って宗教と共に古い。そうして若し宗教とは、ゲーテに従って「一つの知られたる若しくは知られざる威圧的存在を恐れる」畏怖ではなくて、人が「敬礼を与えることによって自敬を保持する」畏敬を基礎とするものでなければならぬならば----『ヴィルヘルム・マイスター遍歴時代』第二巻、第一章----魔術は宗教よりも更に古いと言うべきであろう。原始人が自分の周囲を取り巻く威圧的存在の不気味な力を感じて、少なくともこれを無害にするためにこの力を支配する作法を案出したり信仰したりするならば、其処には既に魔術が存在するからである。更にこの作法によって威圧的存在の力を積極的に自分の欲望達成のために利用しようとするとき、魔術の人生に於ける位置は益々重大を加えて来るであろう。この作法の秘技を握り得た者は人生に於いて特別な地位を占める。魔術者がこの信仰に支配されている社会の中に傑出せる勢力を振るうようになるのは当然である。そうして威圧的存在の害を袂(はら)ってこれを利用するための魔術が、対象に対する畏敬を必要とせぬと同様に、魔術者も亦畏敬の情に充たされた聖者であることを必要とせぬのである。かくて魔術は純正な宗教の中に移行し融解して行かぬ限りは、宗教の傍らに、亦宗教の中に潜入して存在を続けて行く。そうして魔術者は、社会に必要にして亦不気味なものとして、不気味ながらも猶欠くべからざる者として、彼自身一つの畏怖の対象となって存続するのである。

かくて一つの宗教が既に成立せる社会に於ける魔術及び魔術者の位置は、種々の様相を持ち、種々の方向に傾き且つ揺れる。その宗教が多く霊魔の存在とその神秘力とを信ずるものであるとき、魔術には正統信仰の手段としてこれに利用せらるべき所謂白き魔術(Weisse Magie)も亦存在し得る。併しその場合にも魔術の信仰は畏怖に基づくものとしての畏敬の宗教を不純にすべき潜毒を含んでいるであろう。そうしてそれが自然の奇襲若しくは強襲によって、常道以外の道を行こうとする無理を意味する限り、魔術は正統の畏敬を離れて、悪魔妖霊との結合による闇黒の秘行となろうとする強烈な傾向を持たなければならぬ。従って魔術の展開し行くべきおのづからなる方向は所謂黒き魔術(Schwarze Magie)の方向である。実際歴史上それが問題となり勢力となったのは九分通りまで黒き魔術としてであった。魔術は教会の敵として、排斥せられ亦畏怖せられる。魔術者は「大なる敵」悪魔の同盟者として、戦慄を以て嫌忌せられる。そうしてその悲惨な末路が特に物凄き色彩に塗り上げられるのである。かくて或宗教の中に成長せる魔術者伝説(Maguslegende)は、公式な表面の意味に於いては、殆ど悉(ことごと)く強力な異端の誘惑を戒(いまし)める警告である。東洋流の言葉を用いれば、魔術者は所謂殷鑒(いんかん)として信者の前に置かれるのである。

併しそれは教会の立場からする公式な意味である。この公式な意味ばかりでは、それが文学や説話の主題として積極的な内容を獲得する経路が解かれ得ない。魔術者が一種

の英雄として主人公の位置に立つためには、隠微の間に彼を護り立て、これをその位置に飾り上げる民衆の心理が働かなければならぬ。そうしてその飾り上げ方にそれぞれの民族や時代の特殊性が表現される。この意味に於いて、ファウストは宗教改革時代の、独逸の魔術者である。ファウスト伝説は独逸の魔術者伝説として特に独逸民族の所有に属する。

ファウスト伝説がゲーテの『ファウスト』の素材となり得るためには、それは文芸復興期を経過して来た独逸民族精神の胎内を、くぐって産まれたものでなければならなかった。この趣は一派の学者によって---例えば Th. Zahn : *Cyprian von Antiochien und die deutsche Sage*. 1882. ---- ファウスト伝説の源泉と見做されている二つの基督教伝説と比較することによっても明らかにすることが出来るであろう。

その一つは Simon Magus の伝説である。我々は『使徒行伝』(第 8 章、第 9--25 節)に出て来るサマリアのシモンを知っている。同伝によれば、この人は魔術に秀でて多くの人の瞻仰(せんぎょう)を受け「神の大能」とさえ呼ばれていた人であったが、ピリピの教化によって遂に異教を離れ、基督教に帰依した人である。然るに紀元後二世紀の Clementine(クレメンティネ擬書と見做されている)の所伝に於いては、彼が異教世界最大の魔術者である点が強調せられて、その代わりに彼の改宗は取り消され、羅馬に於いて皇帝ネロの前に聖ペテロと色々に法力を較べた最後に、空中に飛翔する奇術を行おうとしたが、ペテロに祈り落とされて墜死したことにされているのである。これが魔術者シモンの伝説である。第二世紀の基督教が、會(か)つて『使徒行伝』に於いて救われたシモンを再び墮獄の大罪者に衝(つ)き戻した理由は何処にあるか。クーノー・フィッシャーに従えば---Kuno Fischer : *Goethes Faust. Bd. I. Die Faustdichtung vor Goethe*. 7te Aufl. 1913.---- それは聖ペテロを推して猶太(ユダヤ)人の基督教を固守しようとした一団の、「異邦人の使徒」聖ポーロに対する反感に基づく。彼等はシモン・ペテロに対するシモン・マグスとして、後者の名に於いて聖ポーロを異端化しようとしたのである。かくて宗派的反感から出発した魔術者シモンの伝説は、中世を通じて黒き魔術の代表者として成長して行かなければならなかった。そうして希臘の異教哲学なるグノーシス派がシモンを根原的存在の啓示として神化すればするほど、キリスト教世界に於いては益々これを悪魔の同盟者として畏怖したり擯斥(ひんせき)したりするのである。この成長過程に於いて、シモンは後のファウスト伝説に類似する二三の説話を獲得する。クレメンティネに基づく空中飛行の話、グノーシスの方から来るヘレナとの結婚及び小人ホームクルスを作る話---最後の話はヴァーグナーに関してゲーテの『ファウスト』にのみ出て来るものであるが、前の二つはファウスト伝説に最初から伴っているものである。併し両者の間に歴史的継承があるか、伝説発生的一般人間的真理から派出した暗合であるか、それはただ歴史的証拠のみが決定するであろう。少なくとも印本となれる最古のファウスト伝に於いては、その記者が『使徒行伝』中のシモンを知っている証拠があるのみで、クレメンティネ中のシモンを知っている證(あかし)はないらしい。そうして孰(いず)れにしても、宗教的反感によって擯斥される対象として成長し行くシモン伝説は、ファウスト伝説の成長とは根本的に方向を異にしているのである。

紀元前四世紀に至って、教会と希臘異教との戦いの間から、キプリアーヌスの伝説が発生した。この名は 258 年殉教の死を遂げたカルターゴの司教キプリアーヌスと結合しているが、彼はその前半生に於いて希臘や埃及(エジプト)のあらゆる神秘教を窮(きわ)め尽くして魔王と同盟を結んだ大魔術師とされるのである。併しそのあらゆる法力も、純潔なるキリスト教徒の処女ユスティナに対しては施すに途がなかった。彼は彼女を自分のものとするために、悪魔の援助の下に百方術を尽くすが、遂にこの纖弱(かよわ)き女性の信仰の力と、彼女を庇護する十字架の記号にはかなわなかったのである。かくて天地の秘密を握れる魔術者の頭目も、懺悔せる罪人として基督教に帰依し、信者としての功を積んで司教にまで昇進する。ユスティナは彼の下に尼となって、肉体の恋は法兄妹の愛に純化される。そうして二人とも殉教者の死を遂げるのである。これがアンティオーキアの聖女ユスティナに関する伝説である。キプリアーヌスは本来執拗なる誘惑者として彼女の伝説の脇師を勤めるのであるが、それは魔術者伝説として成長しつつ、寧

ろユスティナの説話を背後に押しのける。此处では基督教の力が魔術者を粉碎(ふんさい)することによって示されるのではない。それは魔術者をも改宗せしめて自己の中に包容することによってその無敵な力を現すのである。この伝説は十三世紀に集成された諸聖人伝 *Legenda aurea* の中に編入せられ、西班牙(スペイン)のカルデロン『*Der wundertätige Magus*. 1637.)によって劇化された。後者は往々ゲーテの『ファウスト』の先蹤(せんしょう)と見られているものであるが、併しゲーテがこれを知ったのは 1812 年のことであるから、それが『ファウスト』に直接に影響していることは全然考えることが出来ない。問題はキプリアン伝説そのものとファウスト伝説との相関にあるが、両者は魔術に求めるものに於いて共通の動機を持ちながら、その帰趨に於いては全然相反する。キプリアン伝説の精神は魔術者の改宗である。正教の勝利である。キプリアンは正にその改宗によって伝説の主人公の資格を獲得する。併しファウスト伝説は本来その墮獄に、殷鑒(いんかん)によって示さるゝ警告にその真髓を持っているのである。ファウストの墮獄とこれによる警告と----それはシモン・マグスの伝説と相通ずるものがあることは勿論であるが、併し前者の中には悪魔的(ディアボーリッシュ)なものから悲劇的(トラージッシュ)なものへ、悲劇的なものから救済へと展開していくべき萌芽が含まれている。云わばファウストの味方として彼の姿を育て上げて行く民衆の心理が裏面に働いている。其処にこの伝説の発生した時代と、この伝説を育てた民族との特異性が現れるのである。

伝説のファウストは歴史上のファウストをその結晶核とする。十五世紀の末から十六世紀の前半にかけて生きていた者として、我々は名前を異にする二人のファウストを持っているのである。一人は *Johann* と称する。此の男については *Melanchton* の弟子 *Johann Mennel* がその師に聞いた話として書き伝えたものがある。それに従えばファウストはメランヒトンと同国の者で *Kundling* (*Knittlingen*?) に生まれ、クラカウに魔術を学び、遍歴の生活を送って一時ヴィッテンベルクにも住んでいた。大言を以て世間を瞞着し、會(か)つてヴェネチアで悪魔の助けを藉(か)りて空中に飛揚したが、地上に墜落して大怪我をした。そうして悪魔が狗(いぬ)の姿をして彼に随伴していたという。このファウストが 1540 年頃に死んで、それが悪魔に殺されたものであると伝えられていたことは、*Johann Gast* がその *Tischgesprächen* (1548) に於いて早くもこれを述べているところである。然るに一方 *Georg Faust* なる者がヴュルツブルクに現れ、大言を吐き散らして、プラトンやアリストテレスの全著作の散佚(さんいつ)せるものを再現したり基督の奇蹟を再演したりすることが出来ると称したという話を、1507 年 8 月 20 日の書束で、其処の聖ヤコブの僧院長 *Johann Trithem* がその友に書き送っている。トリートハイムは彼自身も魔術者と伝説せられた人であるが、彼の旅行不在中にヴュルツブルクでこういう大言を吐いていたファウストは、彼が帰来したという報を聞いて姿を晦(くら)ましたというのである。このファウストは、自ら "*Faust junior*", "*Magus secundus*" などと称していたというが、何故に彼が「若きファウスト」とか「第二のマーグス」とか称したかに就いては明確な解釈を下し難い。併しそれがヨハネスの子、若しくはその弟子を意味するものであり得ぬことは、両者の年代が同時に重なっていて前後継承を考える余地がないことや、1507 年頃に於いてヨハネスがそんなに有名な魔術者であり得ぬこと等によって断言し得るであろう。そうして「第二のマーグス」はシモン・マーグスに対し、「若きファウスト」は此の種のことに名があった古(いにし)えのファウストに----例えば聖アウグスティヌスが一時心酔したマニ教の司教ファウスツスに----対して称せられたものと解し得るとすれば、それは必ずしもヨハン・ファウスト二世を意味するを要しないのである。ヨハンとゲオルクとは、随所に氏名を変称する同一人であるか、少なくともこの二人は伝説のファウストに於いて一人に融合したか、孰れかと見て置けば大過がないであろう。そうしてこのファウストはその生時に於いて既に独逸に於ける最も有名な魔術者となり、十六世紀の後半、諸書にその事蹟を伝えられつゝ、1585 年に出た、ハイデルベルクの教授にして自らメランヒトンの弟子たる *Lercheimer* の『魔術に対する基督教的考慮と追憶』(*Christlich Bedenken und Erinnerung von Zauberei*) の記事に至っては、ファウスト伝説の大半が殆ど結成されていることを見るのである。

我々が今日所有するファウスト伝説の版本は 1587 年フランクフルト・アム・マイン

の書肆(しよし)Johann Spies から出版されたそれである。この書の無批評な集成的性質から見て、その以前に、写本として行われた恐らく拉典(ラテン)語の記録があったであろうという学者の推測には理由があるであろう。併しそれは今日に於いては既に散佚(さんいつ)しているが故に----ヴォルフエンビュッテル文庫の写本を問題外に置けば----我々は暫くシュピース版を最古のものとして取り扱わなければならぬ。この書が非常な歓迎を受けて、両三年の間に多くの版を重ね、異本を生じ、増訂が加えられ、韻語に移され、独逸国内の他の方言に訳されたという事実は、ファウスト伝説が当時一般に、如何に多くの興味を集めていたかを語るものである。そうしてその翻訳は、国境を越えて、和蘭英吉利仏蘭西等にもこの伝説を広めたのである。

この書に従えば、ファウストはヴァイマールに近き Roda に生まれた農夫の子である。併し子供のない親戚に引きとられてヴィッテンベルクに移り、其処の大学で神学を学んだ。そうして学を好む俊敏な頭脳として儕輩(さいはい)に挺(ぬきん)でるものがあつた。かくて彼は夙(つと)に神学博士の学位を得た。しかし彼の傲慢にして飽くことを知らぬ性質が遂に神学に安住することを許さなかった。彼は聖書を抛棄(ほうき)して魔術の研究に没頭し、志を現世の学に向けて医学博士となり、又天文数理の学を修めて天地のあらゆる根柢を探ろうとした。そうしてこの人間の分際を忘れた不敵な熱望が遂に彼を駆って悪魔を蠱(まど)い寄せるところまで行かせたのである。彼は近郊シュペッサーの森の十字路に立って、深夜、魔術の書に従う作法によって悪魔を喚(よ)び出す。悪魔は修道僧の姿に於いて彼の前に出現する。そうしてその夜は明日の再会を約して別れる。翌日彼の住居に於いて昨夜の魔を喚び出したとき、彼はこれと契約を結ぶことを提言するが、後者は自分が Mephistophiles と呼ばるゝ下級の悪魔で、契約には魔王ルチファールの認可を要する旨を告げる。ルチファールは合意する。契約は結ばれる。条件はファウストが霊としての力を得てあらゆるその願望が充たさるゝことである、メフィストーフイレスがその姿を他人に見えぬようにして絶えず彼の周囲に居り、彼に奉仕することである。これに対して、彼が神に背き、基督教の敵となり、決して再び回心せぬ誓いを立て、血判を以てその魂を売り渡すことを、メフィストーフイレスは要求する。期限は二十四年間である。この期が満つればファウストはメフィストーフイレスのものとならなければならぬ。血判のための血が流るゝときそれは彼の左手に文字を現ずる。"O home fuge!"(おゝ、人よ逃れよ)----『ヴィルヘルム・マイスター徒弟時代』に於いて、演劇に迷えるヴィルヘルムが未知者の手から受け取った警告もこれと等しい----とそれは読まれる。併し傲慢にして不敵なるファウストは敢えてこの契約の中に踏み入って顧みるところがなかった。

契約後の最初の八年間は、彼は助手のヴァーグナー及びフラチスカン僧の姿をとって出現するメフィストーフイレスと、彼の親戚が彼に残したヴィッテンベルクの家に住んでいた。窮理と好奇のための種々の問答、種々の魔法の戯れがこの間の時間を充たす。そうしてファウストの心に後悔が萌(きざ)そうとするとき、メフィストーフイレスは音楽を以て彼の心を紛らすことを解していた。そうしてファウストの心が次第にエピクーリッシュな享楽生活に傾いて、遂に結婚を望むに至ったとき、メフィストーフイレスは百方手段を尽くしてこれを断念させる。その代わりに彼に授けられたる者は、美しい女達を随時に欲するがままに自由にし得ることである。ルター主義的観念に従って、結婚は神のもので、放縦は悪魔のものなのである。そうして説話の進行が第二段の三界旅行に移る前に、地獄の構成から天地の構造型質などに関する、ファウストとメフィストーフイレスとの問答が物語られる。ゲーテが「討論の場」で計画した宇宙観の問答も、かくてファウスト伝説の中に含まれているのである。併しこの問答が全篇の中で果たす役目は、彼と此れとの間に著しい相違がある。ファウスト伝説に於いては、この問答によって示唆される永劫の業火の恐怖と、其処に発生せむとするファウストの後悔とが主要問題である。併し幾度か萌しつゝ遂に内心の浄化となつて結果するを得なかった「ユダの痛恨」は結局ファウストの墮獄の途に随伴するだけで終わるのである。

その次に来るものは三界旅行の八年間である。彼は天に翔(かけ)り地獄を見、又地上を広く巡遊する。羅馬で法王の宮廷を訪(と)い、コンスタンチノーペルで大ズールタン

に謁(えっ)し、アンハルトの伯爵や皇帝カール五世の前で種々の奇術を演ずる。後者の宮廷でアレキサンダー大王とその妃を喚び出した話、前者に於ける花火の戯れと正月に葡萄を取り寄せた話などは、人と場処とを異にしつつもゲーテが変形して採用した説話の中に数えることが出来るであろう。彼の空中飛行、それに用いた翼ある馬と魔の外套と----これ等の観念も亦ゲーテの『ファウスト』の世界を準備する。その他、彼が魯鈍な農夫や、猶太(ユダヤ)人や、坊主などをかついだ魔法の悪戯も、その喜劇的笑劇的気分に於いて、後のファウスト劇に入り込み、ゲーテの『ファウスト』にフモールの要素を豊富に注入する源泉となっているのである。

併しこの八年の旅から再びヴィッテンベルクに帰ると共に、彼の最後の八年の幕が切って落とされなければならぬ。それは彼の隣人なる敬虔な医師の回心の勧告を以て始まる。ファウストは悪魔との契約を悔いて、これを破棄することを決心する。併し悪魔はこれを許さずに却って再度の血判せる契約を強いるのである。その後のファウストの生活は、富饒(ふじょう)なる官能と肉欲との享樂によってその絶望を誤魔化すことである。彼は世界旅行の途次に得た七人の最も美しい女達を対手(たいしゅ)に、ハレムに於けるズールタンのような生活をする。併し彼はそれにも疲れてしまう。そうして最後に来るものがヘレナとの共棲である。

會(さ)て彼のヴィッテンベルクの家で学生の宴会があったとき、女性の美について色々の話をしたあとで、客の一人が世界最美の女、希臘のヘレナを見たいと望んだ。ファウストはこれに応じてヘレナの影を陰府から喚び上げて見せた。そうして彼は今あの姿を夜半に想起して、これを自分のものにしようとする熱望に燃え立ったのである。メフィストフィレスはこの願いを叶えて遣らなければならなかった。ファウストは一瞬間も彼女なしではいられぬようにこれを熱望した。そうして二人の間にユスツス・ファウストという子が産まれた。それは早熟な予言の力ある子供であった。この子を得たのは彼の非常な喜びであった。併しその時にはもう二十四年の期限が將に切れんとしつゝあったのである。

最後の年も終わりに近づいて、僅かに一ヶ月を剩(あま)すのみとなったとき、彼は死刑の時期を待つ囚人のような心持ちの中に居た。彼は自業自得の罪のために懊悩し悲嘆する。最後の夕を彼はその友や学生達と共に近郊リムリヒの村に過ごして、彼等に心からの警告を与えつゝ別れを告げた。そうして四大の荒れ狂う中で悪魔にさらわれたのである。彼の死後ヘレナも亦その子と共に消失した。

これが最古のファウスト伝の大要である。この書の異版の外に、我々はファウスト伝説の通俗書(フォルクスブーフ)の重なるものとして三書を挙げる必要があるであろう。第一は1599年出版のGeorg Rudolf Widmannの書である。第二はヴィトマンの書を簡約増補せるものとも称すべきNikolaus Pfitzerの書(1674年版)である。第三は1725年に出たEin Christlich Meynender(基督正信者)と自称する匿名氏の著である。併し此れ等のものを一々解説することは繁に失するであろう。我々はただゲーテの『ファウスト』を目標として、これに関係する異動を摘記するに満足しなければならぬ。

例えばゲーテが「アウエルバッハの酒場」に結合せる三つの魔術は----卓子から酒を出すことゝ葡萄酒の代わりに鼻を撮(つま)むことゝ、酒樽乗りとは----如何なる成立過程を持つか。第二のものは場処が不明ながら最古のファウスト伝の異本にある。第一のものはエアフルトに於ける某家の祝宴で行われたものとして、第三のものはライプチヒの大市の出来事として(但しアウエルバッハの酒場との関係なしに)、共に1589年の増補版にある。最後のものは幾許(いくばく)もなくアウエルバッハの酒場に定位するが、前二者をこれと結合したのはゲーテの創作である。従ってあの話は、その要素に於いてはファウスト伝説の最古の層に属するのである。

併しグレーチヒェン説話の痕跡を伝説の中に求めるとき、我々は更に新しきファウスト伝まで下らなければならぬ。1587年のフランクフルト版では、結婚せぬことがメフ

イストとの間の契約に含まるゝ条件ではなかった。ファウストがその願望を抱くに及んで、メフィストが極力これを妨げたに過ぎなかった。然るに 1599 年のヴィートマン本に到っては、それが両者の契約の条件に含まれる。それにも拘わらずファウストは結婚を欲するのである。これを欲してメフィストに峻拒されるのである。併しこの両書とも別に恋愛の対象があるわけではなかった。その対象は 1674 年のプフィッツァー本に於いて始めて出現する。それはファウストの近処にある小売店に使われている、相応に美しい、併し貧しい少女である。この少女はただ結婚を条件としてのみ彼の意に従うことを承諾する。そうしてそれが禁ぜられたる結婚の問題と触れてくるのである。これは固よりグレーチヒェン悲劇に見るが如き処女の誘惑と彼女の破滅の挿話として発展して来ているのではない。併しゲーテが彼自身の深刻な悲劇を創造してこれをファウスト伝説と結合することを許す把手(とって)は、兎に角此処に与えられている。

併しこのような細部の問題を離れて「ファウストの書」の四つの段階を貫く推移の線は何処に向いているであろうか。我々は先ず歴史上のファウストとシュピース版のファウスト伝との推移に一種の理想化がはいって来ていることに注目しなければならぬ。歴史上のファウストは、当時の人文主義者若しくはルター主義中の人文学者によって、輕蔑の心を以て報告されている。ゲオルク・ファウストがハイデルベルクの大学と何等かの関係があることは暗示されているが、彼が真正にドクターの学位を持っていることも、彼が特別の学者であり、非常な知識欲の所有者であることも、共に承認されていない。彼は当時に多い巡歴の詐欺師で、その大言壮語によって愚民の信を得、魔術者としての名声を博したに過ぎぬように見える。併しシュピース版のファウストは、特別な俊秀であり、飽くなき知識欲の所有者であり、その大胆不敵な性格から悪魔の盟友となるという迷路に踏み込んだ者に変化しているのである。此の如く彼を知識欲のティターンとして英雄化し、悲劇化することは、その後には亘ってファウスト伝説及びファウスト文学の根本方向を決定している。それは文芸復興の人文主義を経過した後に始めて可能な一つの方角である。そうして又独逸民族の浪漫的な性格を多分に反映する。併しこのティタニスムが墮獄の悲劇に終わらなければならぬことは、歴史上のファウストと殆ど同年配なるルターの宗教改革の精神が、直ちにこの伝説を被覆したからでなければならぬ。結婚に反対する悪魔の主張は、不犯を表看板にして責任なき多妻を実行する(と攻撃されていた)カトリックの僧侶に対する反感なしに考え得ないであろう。悪魔が修道僧の姿をして出現するというのも亦反カトリック的傾向の現れと見なければならぬ。併しこのようなルター主義の色彩がファウスト伝説にとって本質的なものと言い難いことは、ヴィーンのような旧教地方に於いても、こういう反カトリック的外装を改めてファウスト民間劇が行われ得た事実によって証明される。この意味に於いて、ファウスト伝説は、シモン・マールグスのそれのように宗派的本質を持つものではなかったのである。併しカトリックとルター主義との孰れを問わず、正統的基督教は到底この神に背いた悪魔の盟友を、地獄に墮とさずに満足し得なかったことは明らかである。云わばルター主義は正信を代表する者の資格に於いてファウストを断罪するのである。ファウストの数次の後悔、この後悔のユダ的絶望性とこの絶望による救済の不可能、悪魔との再度の契約と墮獄---正信は此れ等の過程によってファウストの悲劇を完成する。そうしてこの悲劇的な最後の強調に於いて、独逸民族の性格は再び戦慄的なものへの愛を満足させるのである。

併しシュピース版以後の「ファウストの書」はこの本質的な線に沿うて伝説を発展させるものではなかった。ヴィートマンの大著は、ルター主義的な説教によって外面的な宗教性を増加するが、衒学的な警告の説教が重きをなすにつけて、ファウストのティタニスムを平浅にして、彼の悪魔との血盟を最初から不当な享楽欲に基づくものに墮落させざるを得なかった。併しプフィッツァーはこの説教を刈り込んで冒険譚を増加し、その大きさを手頃にするによって民衆に近づける。そうして「基督正信者」の著は更にこれを簡約にして説話的興味を主要の位置に進め、これに基づく通俗本はその後ゲーテの少年時代に至るまで、粗紙に印刷された安本として民衆の愛顧を継ぐのである。この間の経過は、約言すれば宗教からの自由と、冒険譚的興味の増進である。民衆は次第に気軽に、その不思議への愛と空想の戯れとを以てファウスト伝説と遊ぶことが出来

るようになった。そうして独逸民族は、三たびファウスト伝説にその刻印を捺するのである。面白い話を要求する心が此の種の伝説の成長を規定することは孰れの国、孰れの民族でも同様であるが、その面白さの内容に於いて、特にその機智やフモールを遊ばせるに足るものを、就中(なかんずく)酒神の饗宴に関する擬譚を愛することは、独逸的性格を示すものと云わなければならぬ。ゲーテが「アウエルバッハの酒場」に結晶させたようなフモールは、ファウスト伝説そのものゝ中に多分に用意されてあるのである。

併しファウスト伝説がファウスト文学に向上して、その本質に含まるゝ悲劇性を著しく高調するためには、この伝説は、云わば一度外遊して来なければならなかった。かくて我々の視点は「ファウストの書」からファウスト劇の方へ転ぜられなければならぬ。

シュピース版が間もなく英訳されたことは前に述べた。これを見て直ちにその天才に点火されることを感じたのは Christopher Marlowe (1564 - 1593) である。シェークスピアの同年者にして、劇団に於ける彼の先輩である。激情的な生涯を送って、三十にしてその恋仇の凶刃に倒れた俳優兼劇作者である。彼の "The tragical History of Doktor Faustus" は既に 1588 年に出来ていたらしい。それは実演用台本として他人の手による数箇所を竄入(ざんにゅう)を見たあとで、1604 年に出版された。そうしてそれがファウスト伝説の悲劇的本質を抽出強調しつつ、ファウスト劇の先鞭を着けたのである。

プロローグは、ファウストの前身を物語ったあとで、彼が今神学と魔術の岐路に立っていることを告げる。そうして第一幕があくと共に、後世に至るまでファウスト劇の典型となった書斎の独白が始まるのである。彼は飽くなき認識欲によって哲学を窮(きわ)め、神学を窮める。併しその孰れも彼の永遠の渴を鎮めるに足らず、魔術こそ彼を世界の支配者とするもの、彼を神と等位に置くものであることを彼は述べる。これに始まって全曲の進行は殆どシュピース版の物語る通りに進み、ただ詩人の本能に従って最も劇的に効果ある場面を抽出しこれに敷衍するのみで、彼自身新たにこれに附加する説話は幾許もない。彼のファウストの根本衝動はあらゆる意味に於いて世界の支配者たらしとする熱望である。ニイチェの言葉を用いれば権力意志(ヴィレ・ツォア・マハト)である、認識と共に権勢を、豪華と共に美を、金銭と共に恋愛を、悉く生の盃の溢るゝまでに味わい啜ろうとする。そうしてこの不敵の性格が序幕から善き天使と悪き天使との囁きを両耳に聴きながら、幾度か悔恨を体験しつつ、最後まで悪魔と同伴の道を行き尽くすのである。その途中、一方には羅馬法王廷やカール五世の宮廷に於ける物々しき魔術の活動があると共に、一方、騎士や商人をかつぐ戯譚にも事を欠かない。そうして世界最美の女性ヘレナの獲得のあとを追うて彼の最後の場がやって来るのである。十一時から十二時までの一時間、時計の鳴る毎に彼の悔恨と恐怖とが高まって行く。そうして彼があらゆる遁路を心に描きつゝのたうち廻っているうちに、深夜の十二時が鳴って彼は永遠の呪いの中に羅致されるのである。この終幕も亦ゲーテ以前のあらゆるファウスト墮獄の劇に対して典型となったところである。

かくてファウスト伝説は、激情の人マーローの全身を打ち込める同感によって立派な戦慄悲劇となった。そうしてそれが再び故国に帰るべき途は、当時の独英劇団の情勢によって十分に準備されていた。それは独逸の劇団が未だ野蛮幼稚で、旅興行の英吉利劇団が独逸の到るところで歓迎されたからである。ファウストは英吉利劇団が独逸に贖(もたら)した最も喜ばれる土産であった。そうしてそれは故国に帰参するときに、再び身をその水に適合させなければならなかった。独逸の民衆はフモールと戯譚を愛する。ハンスヴルストという専門の道化方は民衆の寵児であった。故にファウストはその悲劇的純粹の高みから幾分身を下しても、改作、附加、若しくは新作によって再び独逸の血を豊かに吸収する必要に迫られる。云わばそれは数歩を原始状態の中に再び退きつゝ其処で独逸の民衆の中に根を張ることになるのである。十七世紀の間、ファウストは民間劇(フォルクスシャウシュピール)として盛行した。それが十八世紀に入って芸術劇によって次第に駆逐されても、その伝統は人形芝居として猶保存される。K. Simrock : Puppenspiel von Doktor Johannes Faust (1846) はこの人形芝居の末期の形態を記憶と想像を頼りに再構成したもので、ゲーテの『ファウスト』の記憶が逆にその中に流れ込んで

いる形迹(けいせき)なきを得ないが、それでも全体の構造と気分とを髣髴(ほうふつ)させるには足るであろう。戯謔の要素を殆ど一身に担う従僕 Kasperle (Kaspar) がファウストの悲劇的方面と対照しつゝ絡み合つて、彼の最後の戦慄をさえその滑稽によって物凄くしている。ゲーテがファウスト伝説を特に「あの注目すべき人形芝居の話」と呼ぶとき、彼のファウストの印象は特に此の種の人形芝居によって刻み込まれたことを思わせる。彼がマーローのファウストのことを知ったのは 1818 年のことであるが、其処に源泉を汲む人形芝居を通じて、少年以来遠くからマーローの呼吸には触れていたのである。併しカスパーがファウスト劇のいかめしさを融かして如何にこれを気楽な戯れの対象に改鑄(かいちゅう)していたかは、最初に警告として発生したファウスト伝説の戯曲化が、十八世紀の初頭から中葉にかけて、ベルリン・ケーニヒスベルク・フランクフルト等の各地で、それが正教と良俗を紊(みだ)す虞(おそれ)ある故を以て、興行を禁じられようとした事実によつても推測し得るであろう。カスパーは墮獄者ファウスト伝説の地獄の硬結を柔らかに掘り返す蜥蜴(とかげ)の一種である。かくて新たに発生せる心情の自由が、出発点となれる人文主義的英雄化の動機の再生と邂逅するとき、其処には救わるゝファウストの観念も亦可能とならなければならぬ。啓蒙主義は、理性の神化によつて、再び認識欲の巨人ファウストを英雄化する時期を創出した。そうして最良の意味に於ける啓蒙主義の選手レッシングは、始めて救わるゝファウストの劇的構想に到達するのである。

レッシングがファウスト伝説を新興独逸国民文学にふさわしき一素材と考えたことは、彼の『文学書翰』第十七書(1759 年)によつて明らかである。彼が自らファウストを劇化しようとして企てたことも彼の『演劇遺稿』(1786 年刊)によつて伝えられた断片や計画によつて証明される。1775 年に紛失したと称せられる稿本が果たして完成したものであったかどうかは、多くの疑いの存するところであるが、その梗概は彼の友 Blankenburg 及び J. J. Engel の書束によつて知ることが出来る。それはレッシングの所謂二様の可能なファウスト----一つは悪魔を用いずに近代生活そのものゝ中に行わたるファウスト的運命である。それは実現されれば『エミリア・ガロティ』のような様式のものになったであろう----のうち「通俗の伝説に従う」ものである。レッシングはこれに「地獄の序曲」を附する。魔王ベールゼブブの前に多くの悪魔が集まってそれぞれの破壊誘惑の作業を報告する。多くのものは魔王によつて否認せられ擯斥せられて面目を失するが、ただ一魔の思い浮かべた計画のみが魔王の賞讃を得る。それは神の寵児を奪う計画である。只管(ひたすら)に真理の追窮に没頭して全然他を顧みぬファウストを墮落させる計画である。魔王は、この男に対しては施すべき手段がなきことを嘆く悪魔に対して、ファウストの余りに一事に熱中する性質が即ち誘惑の乗ずべき罅隙(こげき)であることを示唆する。そうしてその次に例の書齋の場が来るのである。併しレッシングのファウスト計画に於いて重大なのはその最後である。事件は型の如くに進行して悪魔がファウストの霊を前に勝利の歌を唱おうとするとき、天上の声がこれを妨げる----「凱歌をあげるのはおよし!お前達は人類と知識とに勝ちを得たのではない。神が人間に、衝動のうちの最も気高いものを授けたのは彼を永遠に不幸にしようためではない。お前達が見て来たもの、今自分の手に入れた気であるもの----それは幻に過ぎなかったのだ!」かくの如く全篇はファウストの夢として、彼に与えらるゝ上よりの警告として終始するのである。

かくて人類の精神史上ファウストは遂に救わるゝ時期に到達した。併し認識欲とその神的意義と----この観念のみでは全人としてのファウストは未だ救いを全くするを得ないであろう、マーローのファウストさえ救わるゝを得ないであろう。況(ま)してその過程が一場の夢に過ぎぬに於いては猶更である。レッシングの拓いた途は更に後に来る者を待たなければならなかった。そうして其処に若きゲーテが単に認識欲のみならず、一切体験の衝動、美の渴望、復元への全的没頭の宗教的動機を以て装われつゝ登場する。そうして夢ならぬ現実の痛切なる苦杯を味わせながら、ファウストを人生の深刻な途に導く。而(しか)も彼は 1786 年まではレッシングのファウスト計画について何の知るところもなく、独自の途を歩み出すのである。両者の途は「初稿」が既にあれほど進んだ後に遭遇する。「天上の序曲」にはレッシングの地獄の序曲の示唆が部分的に働き得た

であろうが、併しゲーテの規模は既にレッシングを超えて遙かに大きくなっていたのである。

我々は、その出版年時より言えばゲーテの『ファウスト』に先立つものとして Weidmann(1775), Maler Müller(1776-8), F. M. Klinger(1791)等の劇、対話及び小説を持っているが、これ等はその独創に於いて別に注目すべきものを持つとは言い難いであろう。故に我々は此れ等のものを飛び越して、直ちにゲーテの『ファウスト』に進むべき時期に最早到達しているのである。

2. 『ファウスト』第一部

ゲーテの『ファウスト』は、前節に述べた長い歴史の後に、ファウスト伝説及びファウスト文学の頂点として成立したものである。従ってそれは単純に彼の主観的「告白」の容器として利用されたものとのみ見ることが出来ない。彼はファウスト伝説を劇化するために、最も本質的な、最も劇的構成に妥当な、ファウスト文学の伝統にとって根本情調をなすところのものを生かそうと努力することを忘れなかった。この意味に於いて彼は正にファウストを描こうとしたのである。併しファウストを描くためには彼の内心の熱をその中に吹き込み、自己の体験を豊かに其処に盛らなければならぬことは勿論である。彼は彼自身の氣息を吹き込むことによってファウストを彼の時代に生かした。そうしてそのために伝説を極めて自由に取り扱った。併し仔細にその内容を検査する者は、彼が細部に至るまで如何に伝説を尊重し、伝説の中からそのインスピレーションを汲もうとしているかを発見するであろう。その視点からファウストを見ることを忘れるとき、それはただ奇怪な気まぐれな落想の連続で、よくもこんな場面を案出したものだと思われるような不思議な作品とされるのは自然である。併しこの奇怪な姿によって、彼は始めてファウストの物語や芝居を数世紀に亘って愛玩して来た独逸民族にその最後の完成を贈与するのである。レオナルド・ダ・ヴィンチ「聖晚餐」が同一主題を取り扱う先輩の長い実験や模索の一連の後を享(う)けて、この問題の最後の答案ともいふべきものを提出したのと類似した意味に於いて、ゲーテはファウスト伝説の問題に空前絶後の芸術的解決を下す。それ故にこそ彼の『ファウスト』は独逸----並びに欧羅巴----の精神史にあれほど重要な意義を持って来るのである。

彼がファウスト伝説の骨髓として見抜いたものはそのティタニスムスである。認識と云わず、一切体験欲と云わず、凡そあらゆる至高のものを身につけて宇宙の根原と共に生きようとする憧憬と努力とである。この憧憬と努力に伴う悲痛、絶望、戦慄、高揚、憂鬱、放縦、耽溺等、あらゆる情調のニュアンスである。そうして彼は此れ等のものを総攬した上で、而もそれが地獄のものではなくて、天への道程であることを認識する。故にファウスト伝説はその本来のティタニスムを寸毫も失うことなしに、ゲーテに至って救われるのである。そうしてあらゆるティタニスムも亦ファウストと同時に救われる。此処にゲーテの『ファウスト』の精神史的事業がある。そうしてこの精神史的事業の遂行にゲーテその人のあらゆる体験や努力や思索が参加して来ることは、言を俟たぬところである。

併し彼はファウスト伝説に於ける色彩の豊かさやフモールの横溢(おういつ)をも亦忘れなかった。舞台は色とりどりの生活を繰り広げて、眼もあやに展開する。そうして民間劇や人形芝居であれほどの人気者だったカスパールは、此処では悪魔のメフィストを融合して、メフィストの一身には、不思議な物凄い滑稽が結晶する。これも亦作者が従前のファウスト劇の芸術的特徴を見抜いて、これを空前絶後に深刻に発展させたのである。『第二部』に於けるヘレナの如きも亦同様の高揚を受けた部類に入れることが出来るであろう。それ故にこそ独逸の国民文学は二重にも三重にもゲーテに感謝すべき理由があるのである。

『ファウスト』の成立に就いて、我々は四期を区別することが出来る。1773年から1775までの青年時代である。我々が所持する文献で云えば、所謂 Urfaust(初稿)がこの時代

を標識する。第二期は主として 1787 年から 1790 年まで。"Fragment"(断簡)の名の下に始めて公表された一書によって示されている。そうして第三期は 1797 年から 1806 年まで、現行の『第一部』が漸く完成を見た時である。1825 年から 1831 年まで、『第二部』のために費やされた第四期は、此处に触れる必要がないであろう。所謂「初稿」の前に、更に「散文ファウスト」の草稿があったという推定---Gustav Roethe : Die Entstehung des Urfaust(1920); R. Petsch : Zur Chronologie des Faust(1926)等---については、証拠とすべきものなき今日に於いては論壇を避けるのを至当とする。

ゲーテが『ファウスト』を書く因縁は、既に少年時代に萌(きざ)しているということが出来る。それは彼が民衆の一人としてファウスト伝説に馴染み、愛したことが、彼をしてこの素材を取り上げさせる理由になっているからである。それは彼が求めて得たものではなかった。彼の所謂「形象狩り(ビルダーヤクト)」によって書中から狩り出されたものではなかった。粗紙に印刷された安本の通俗書のうちの一つとして、少年の彼が「ファウストの書」をも貪り読んだであろうことは、『詩と真実』の沈黙にも拘わらず、九分通りまで推測することが出来る。彼は又フランクフルトやシュトラースブルクに於いて、恐らくライプチヒに於いても亦、人形若しくは俳優によるファウスト劇を見た。ファウストは特別の読書や研究を待つことなしに、云わば少年ゲーテの隣人となっていた。そうして機縁が熟すると共に、彼は格別の準備なしにこの隣人を直ちに素材として取り上げた。彼が「ファウストの書」を研究的に読み始めたのは、制作の第三期、『第一部』の完成にいそしんでいた時代である。そうして準備なしにこれを取り上げ得たところに、『ツェーザル』や『マホメット』とは異なる自然の根深さがあったのである。それが愈々制作に着手されるために必要なのは、ただ彼自身のうちに内面的機縁が熟することのみであった。そうして我々はこの内面的機縁として五つのものを挙げる事が出来るであろう。一つにはライプチヒに於ける大学への失望。二つにはフランクフルト帰養時代に於ける神秘主義、錬金化学等の研究。三つには人類の「根原性」に対する、ヘルダーの影響による開眼。四つには『ゲッツ』のための労作に伴う十六世紀への興味。五つにはゼーゼンハイムのフリーデリケを捨てたことについての自責と悔恨。

併しファウスト伝説の中には、この青春の体験のみを以ては充たされ得ぬ多くの場面を持っている。『第二部』の世界は、大体から云って、未だ彼に遠いものがあつた。然らば当時のゲーテがその心眼を以て明らかに見ることを得た部分はどんなものだったか。「もう一つの[ファウストの]注目すべき人形芝居の話は頗る多くの音を発しつゝ、私の中に反響し、唸りを返した。私も亦あらゆる知識の中に彷徨し、早くもその浮誇(ふこ)を見せつけられていた。私は又実人生に於いても色々様々のことを試みて、而も常に益々不満になり、愈々悩みを増しつゝ立ち返って来た----」と『詩と真実』の中に(第二篇第十章)ゲーテは言っている。この言葉を具体的に『ファウスト』の諸幕に就いて換言すれば、それは知識への絶望と魔術への献身である。学生生活に附随して来る大胆と戯謔である、就中(なかんずく)恋愛の陶醉とその苦盃である。そうして実際我々が「初稿」に於いて持っているのは、これ等の主題に関する部分に限られているのである。開幕の独白と地霊の出現とヴァーグナーとの問答、飛んでメフィストと新入生との学習問答、アウエルバッハの酒場----こういう大学生活の周囲に結晶して来る数場の後に、所謂グレーチヘン悲劇が、その舞台面と感情と直感とに於いては殆ど完成したものとして我々の前に出現する。併し『ファウスト』の全篇から云えば、其処には「大なる罅隙(こげき)」が猶残存するのである。

其の後十余年、ヴァイマール初期の政治的体験を中に挟んで、1786 年ゲーテは伊太利旅行の行李の中に、他の未完成の諸作と共に『ファウスト』の草稿をも携帯する。そうして『イフィゲーニエ』と『エグモント』を完成したあとで、『タッソー』と共に『ファウスト』に帰るのである。1788 年の春から夏にかけて彼が『ファウスト』の筋立てや「魔女の廚」の場の仕上げに取りかかっていたことは、『伊太利紀行』や日記書翰等によって明らかであるが、此の間に於ける彼の制作態度は最早「初稿」時代のそれではなかった。『イフィゲーニエ』が示すような古典主義の信条と趣味との現在にいて、青年時代の昔に帰るのが今や彼の努力の焦点であつた。甘き哀愁(ヴェームート)と愛着と

が自嘲の心と交錯しつつ、過去と現在との橋渡しが彼の問題となるのである。而も『ファウスト、一つの断簡』を当時企てられていた全集に予告してあることが、彼の制作を背後から促進する鞭となっていた。併しこの状態の下にあっては、彼は『ファウスト』の仕事に多くを加えることが出来なかった。1790年、彼は「此度のところ」として『断簡』を予想以上の断簡として出版してしまった。この時期に新しく出来上がったものは「魔女の廚」と「森と洞」だけである。前者は現在のゲーテを昔のゲーテに連れ帰るものとして、特に北方魔術世界の臭味の濃厚なものである。後者は現在の古典主義から出発して、ファウストの最も熱情的な場面に橋を架ける。『ファウスト』が完成するためにはこの時期も亦挟(はさ)まって来なければならなかったのである。書齋に於ける独白の場と世界遊歴に出発するファウストとの間を繋ぐ----従って悪魔との盟約を舞台上の現在として出現せしむべき----「大なる罅隙(こげき)」は依然としてそのまゝ残される。

今や『ファウスト』の完成に必要なものは、全体通観の立脚地である。個々の部分はそれぞれの位置を指定して、罅隙を罅隙として自覚せしむべき原動力である----この意味に於ける全篇のイデーと、このイデーから来る新なる感激と振起とである。『断簡』を出版してしまって当分これを顧みる気がなくなっていたゲーテに働きかけて、次第にこの仕事に帰らせ、而もこれに全篇のイデーによる統一を示唆したものは、シラーの功績である。1797年の夏は『ファウスト』の成立史に於いて劃期的な夏であった。第一部の前に来る三つの序曲中、最初の二つは明らかにこの時の制作である。第三の最も重要な「天上の序曲」も少なくともその結想に於いてはこの時期に属しているであろう。曾て青年の情熱を真っ向から灑(そそ)ぎ出しつつ着手したこの仕事を、ゲーテは今や意志と研究と通観とをもって追究した。そうして1806年の春には『第一部』の草稿が完成したのである。個々の部分に就いて言えば、悪魔との盟約を実現して「大なる罅隙」を填(うず)めるのが彼の一つの大なる仕事であった。グレーチヒェンの悲痛なる運命の進行に伴うファウストの墮落と復帰とを----換言すれば「ヴァルプールギス」の場----を書くのがもう一つの大なる仕事であった。この二つの計画に於いて、ゲーテは共にその最初の規模を縮小する。前者に於いて「討論の場」が欠け、後者に於いて「魔王親臨の場」が欠けるに至ったのは、この二つの場が特別に壮大な規模を持っていただけに、痛惜に堪えぬところであるが、それは我々がこの計画を知っていればこそ遺憾を感じるのであって、それなしにも全篇の連鎖は欠けずに通用するのである。

以上が『第一部』成立史の大要である。併し既に完成『第一部』を前にするとき、我々はこの成立史を忘却して、それが我々の前に置かれてあるまゝに、歩々にその発展に伴い行かなければならぬ。「献(ささ)ぐる詞」に於いて詩人はその制作の主観的拠点を定める。青春の回顧と級友の離散とを嘆く哀愁の中にあって、彼は「薄(せま)り寄す」る「彼の静けく厳しき国への係恋」に身を委ねる。「舞台上の前戯」に於いて、彼は劇場の世界との渡りをつける。彼は詩人の権利を劇場に売り渡すことなしに、舞台が許す最大の自由を享受せむとする。そうして「天上の序曲」がファウストの運命を、神と悪魔との争い----というよりは、悪魔を通して行なわれる神の愛----の見地から大観する立脚地を設定する。そうしてそれからファウストの地上生活の描写が始められるのである。

ファウストの切願は「世界をその奥の奥で統べているもの、」それは何かを認識したい、一切の作用力と種子を観たい」というところにある。併し大学の四科はこの渴望を満たして呉れない。学術に絶望して身を魔法に委ねたのは、偏(ひとえ)にこの切願に依るのである。併し大宇宙の符によって喚起されるものは、彼がこれを攫(つか)む「把手(とって)」を欠くが故に「壮大な観物(かんぶつ)」に過ぎなかった。小宇宙の符によって眼のあたり地霊を喚び出すことには成功したが、彼にはこれを維(つな)ぎ留めて置く力がなかった。地霊の消失によって絶望の淵に沈もうとするファウストの書齋の扉を、凡常なる努力家のヴァーグナーが叩く。これを対手に知識の棚卸しをしている間に、ファウストの心には幾分の沈静が帰って来る。併し再び一人となったとき、地上生活の狭苦しさが又ひしひしと彼に迫るのである。結局彼は毒杯を仰いで自殺してしまって、新たな彼岸の生を試そうとする決心に到達するが、其処に響いて来る暁の復活祭の歌が、幼児の甘い記憶を揺り動かしてその盃を唇から離させるのである。

その翌日の復活祭の散歩、落日のあとを見送る憧憬の高調、これに乗じて出現する狗形のメフィスト、メフィストとの契約、世界漫遊の出発----その小手調べとして「アウエルバッハの酒場」の酔興が挿入され、その出発の準備として、「魔女の厨」にファウストの若返りが行われる。そうしてそのあとを受けて、ファウストの『第一部』に於ける唯一の世界体験----所謂グレーチヒェン悲劇が始まるのである。

ファウストは、教会帰りの市民の娘グレーチヒェンと街道に逢って、「仏蘭西人のような」、「極道ハンスのような」情欲に掴まれる。併しグレーチヒェンの部屋に彼女の留守の間に忍び込んで、室内に籠もる彼女の匂いを嗅ごうとして来て見ると、彼はその清浄な純潔な空気に打たれて、本当の恋を感じようになるのである。本当の恋を感じずるが故に彼女から遠ざかろうとするようになるのである。併しメフィストは固よりそれを許すべくもない。彼は隣女の家でファウストをグレーチヒェンに逢わせ、遂に二人の間は園亭の黄昏に接吻するまでに発展する。最後の段階はただもう一歩である。併しファウストは此处で一旦踏み止まる。

「森と洞」の場で我々は、彼がグレーチヒェンの町を遁れて、森林の中に籠もって自然の力を精一杯享受していることを発見する。併しメフィストが来てこの平和を擾乱(じょうらん)する。彼はグレーチヒェンの思い挫折(くじか)れたる其日々々を描きだしてファウストの狂乱の係恋(けいれん)を煽り立てるのである。紡車に座して消え入るような思いにやつれている彼女の側に彼は遂に帰って来る。そうして後園の散歩によって、グレーチヒェンは恐ろしきまでに無抵抗な純情のままに、ファウストのその夜の来訪を許すことになるのである。忍び逢うためには母の眼を避けなければならぬ。母の眼を避けるためには、ファウストの渡す睡眠剤の三滴を彼女に用いなければならぬ。そうしてその過量が彼女を殺すことになった。それが幾回目(いくど)の来訪のときであったか、ゲーテはそんな問題に拘泥しない。

「泉のほとり」でグレーチヒェンは、他人の噂につけても、既に純潔を失える我が身の上を悲嘆する。壁龕(へきがん)の前でその涙を悲しみの聖母の前に灑(そそ)ぎ尽くす。而もファウストを待つ深夜の扉の前で、彼女の兄さえ恋人の手にかかって死ぬのである。恋人は逃亡する。一人残されたグレーチヒェンは最早胎内の子の胎動を感じずる。そうして寺院の中に祈りつつ、呵責の霊の呵責に悶絶する。----彼女の悲劇は、このように一場毎に深まり行くのである。

彼女をこのような状態に衝き落として、ファウストは今何をなしつつあるか。彼はメフィストに誘われて、ブロッケン山の魔女祭に放埒な歓楽を貪りに行っている。美しき若き魔女を対手(あいて)に卑猥な舞踏の足を踏んでいる。併し其処に刑死せるグレーチヒェンの幻影が現れて彼の眼を捉える。彼は激怒して、グレーチヒェンのその後の運命を秘して居たメフィストを罵倒しつつも、彼と共に黒馬を駆ってグレーチヒェンの牢屋に急ぐ。彼女は窮余遂にその嬰兒を水中に投じて乞食をしつつも世間を流浪した後、今は囚われて処刑を牢屋に待っているのである。メフィストは牢番を眠り入らせる。ファウストは牢内に入ってグレーチヒェンを救い出そうとする。狂気せる彼女にもファウストの声はききわけられる。彼に縋り寄る喜びも彼女は忘れていない。併し彼女は脱走を肯(がえ)んじない。その押し問答の間にメフィストが姿を現すと、彼女の志は決定する。彼女は神の審判に身を任せて、天軍の保護に一切を委ねる。今は彼女はファウストを見ると「ぞっとする」のである。メフィストは言う----審(さば?)かれた！上よりの声はいう----救われた！グレーチヒェンの声が末細りつつ内から「ハインリヒさん！ハインリヒさん！」と呼ぶのを聞き流して、ファウストはメフィストと共に再び姿を消すのである。

目 次

献ぐる詞
舞台上の前戯
天上の序曲

悲 劇 第一部

夜
廊門の前
書斎
書斎(二)
ライプチッヒなるアウエルバッハの酒場
魔女の厨
街
夕
散歩道
隣女の家
街
庭
園亭
森と洞
グレーチヒェンの部屋
マルテの庭
泉のほとり
廊壁に沿える巷
夜
寺院
ヴァルプールギスの夜
ヴァルプールギスの夜の夢
曇れる日
夜
牢屋

註
解説(巻頭)

ファウスト(第一部)

献ぐる詞

再び近づき来るよ汝達(なんだち)----嘗てそのかみ
朧なる眼に現れ来し、よろめける姿ども。
此度(こたび)こそ汝(な)を繋ぎ留むべく試みやせむ？
我心猶彼(か)の夢に牽かるゝを覚ゆるぞ怪しき。
汝達(なんだち)薄(せま)り寄す！さらば好し、さながらに振る舞えかし、
靄霧(もやきり)の中(うち)より、我が身を繞(めぐ)りて、立ち昇るまにまに。
我胸ぞ若やかに揺らるゝ思いなる、
汝達(なんだち)が列(つら)を吹きめぐる呪(まじ)の氣息(いぶき)に。

汝達が伴い来るは、楽しかりし日の面影の数々、
さて、連れて浮かび出ずるこそ、許多(あまた)のなつかしき影なれ。

半ば消え去りし古き語り事にも似て、
若き日の恋、友垣、諸共に身動(みじろ)き出ず。
痛き思い更に新たに、我が歎き
ラビリントなす人の世の踏み迷い路(じ)を又徘徊(たもとほ)り、
さて、善き人々の----幸(さち)に誑(たばか)られつゝ
美(うま)し時奪い去られて我が先に消え失せにける----名をぞ呼ぶなる。

彼等はえ聞かず、次ぎて来る歌々を----
その魂達(たまだち)のなぐさにこそ、始めの歌々は我が歌いしを。
親しく寄りし団欒(まとい)は散(あら)けぬ、
始めの反響(こだま)は、あわれ、消えぬ。
わが悲歌は、見知らぬ群れの耳に響き、
その讃辞(ほめこと)さえ我が心に痛き。
昔わが歌に楽しみし誰彼、
猶生けるもあれ、世に散りて迷えり。

さわれ我を掴む、久しく離れいし、
彼の静けく厳(いつく)しき精霊の国への係恋(あこがれ)。
今、わが囁き出ずる曲は、定かならぬ調べに、
エオルスの琴なして浮かび漂う。
戦慄(おののき)我を襲い、涙、涙に踵(つ)ぐ、
硬き心こそ和み軟らげ----
わが持(も)たるもの、遠く見えつゝ、
消えにしものぞ、身に現(うつゝ)なる。

舞台上の前戯

座方。座付き詩人。道化方。

座 方

御両君は、これまで、難儀や当惑の際に、
幾度も私を助けてくれた人だ、
今度の企てが独逸の土地でどう行く見込みか、
言って貰いたいものですね。
私はどうにかして大勢の御気に入りたいと切望しています、
とりわけ連中は自分も楽しみ人にも楽しませようとしているのですからね。
柱立ては出来ている、板もととりつけられた、
そうして誰も彼もお祭りを待ち設けている。
連中はもう眉毛(まみえ)を昂(あ)げて、ゆったり構えて、
座り込んで、吃驚(びっくり)させて貰いたがっておいでなさる。
私も民衆の心を楽しませる手は承知しているが、
それでも今度ほど困ったことは嘗(かつ)てなかった。
勿論見物が最も優れたものに馴れているというわけではない。
でも彼等は恐ろしく沢山読んでいるのだからね。
何もかもぴちぴちと新しく、而(しか)も意味が深くて
おまけに御意に召すというようにするにはどうしたものでしょう？
というのは、無論大入りを見たいからです。
その時、人波が我々の小屋へ押し寄せて来て、
猛烈に繰り返される無理押しで、
狭い恵みの門を突っきろうとするのですな。
昼日中に、もう四時前に、
押し合いへし合い札売り場まで喧嘩でやって来て、
飢饉時に麵麴(パン)屋の戸口で麵麴のためにするように、

切符一枚のために頸根っこを挫(くじ)くことさえやり兼ねないのですな。
こういう奇蹟を雑多な見物人の上に行うのは
ただ自身だけです。我が友よ、今日一つそれをして下さい！

詩 人

おおあのごたごたな大衆のことを私に聞かしちゃいけません、
あれを見ると精霊が私達から遁げ去ってしまいます。
涛(なみ)と騒立(さわだ)つ群衆(ぐんじゅ)は私に隠して置いて貰いましょう、
それは私達を心ならずも渦巻きの中に捲き込むのです。
いっそ私を静寂な大空の隅に連れて行って下さい、
ただ其処でのみ清浄な歓喜が詩人のために花咲くのです、
其処で恋と友情とが、神々のような手で
我々の心の祝福を創りもし、はぐくみもしてくれます。

噫(ああ)！其処にあって我々の深い胸から湧いて出て来るもの、
唇が羞じらいつつ口籠もって見て、
時には出来損ない、時あって漸く仕遂げるもの----
そういうものを荒々しい刹那の力が嚙(の)んでしまう。
それは幾年月(としつき)をいそしみ抜いて、始めて
完成した姿となって現れることさえ珍しくはありません。
きらめくものは刹那のために生まれて来た、
真実なものは滅びずに後の世までも残るのです。

道 化 方

後の世の話こそ凡そ聴かして貰いたくないものですなあ！
私が後の世の話をする気になったとして御覧じろ、
一体誰が今の世に娯(たの)しみを与えと思し召す？
今の世も娯しめは欲しいのです、それなしにはいられないのです。
腕のある一人の若者がいるということは----
思うに、これだけでも何かの足しにはなりましょうぜ。
面白可笑しくもてなしをする手を心得ている男は
民衆のむら気のも厭気をさすようなことはありますまい。
そういう男はなるだけ大勢の見物を欲しがります。
益々鮮やかに奴等を感じさせてやろうという訳合いでねえ。
そう云った次第だから、ただ旨く、申し分のないようにおやんなさいよ、
君の空想に、そのあらゆる御供の行列をつけて、
理性や悟性や感覚や熱情を勢揃えして、物を云わして御覧なさい、
でも----よく考えて置きなさいよ----道化を忘れちゃいけませんぜ。

座 方

併しとりわけ事件を多くなさい！
人は見に来るのです、人は何よりも先ず見たがるのです。
多くのものが眼の前に手繰り出されて、
大衆が驚きながら大口を開いて見ていられるように行くと、
貴君の人気の幅が殖えて、
貴君は広く好かれる男になれる。
嵩(かさ)の人を手玉にとるには嵩でこなすに限りますよ、
つまりは銘々好き勝手に何かしら搜し出すのですからな。
数を多く持って来る男は、大勢に何かを持って来てやる訳合いで----
誰も彼も満足して小屋から出て行きます。

一篇の作を出すときでも、片々(へんべん)にして出すが宜しい。
こういう風のごっちゃ煮は、きっと貴君にうまくやれるでしょう、
献立するのも楽なら、並べて出すのも楽ですからねえ。
よしや貴君が纏まったものを提供して見たところで、それが何になります？
公衆は結局貴君の大切なものをむしり壊してしまうのが落ちですよ。

詩 人

貴君方には感じられないのです、そういう手細工はどんなに下らないか！
そんなことは本当の芸術家にどれほど不似合いだか！
怪しげな手合いの間に合わせ仕事という奴が、
御見受けするところ、貴君方の格言にまっているのですね。

座 方

そんな悪口は私を怒らせるに足りませんね----
誰でもうまく仕事をやろうと思う男は
一等詔(あつら)え向きの道具を握るべきです。
考えて下さいよ、貴君の役目は軟らかな本を割ることだ。
そうして貴君がどういう人間の為(ため)に書くのだから、忘れちゃいけませんぜ！
この客は退屈まぎれの所在なさに来る、
あの客は並べ立てた御馳走に満腹してやって来る、
そうしていつでも一等いけないのは、
新聞を読み飽きて来るのが随分多いということです。
見物は、仮装会へ行くように、散乱心で我々のところへ駆けつける。
その足取りをせき立てるのは、ただ物ずき心に過ぎないのです。
婦人方は器量と化粧をみせびらかして、
給金なしに芝居を一緒にやって下さる。
それを、貴君は詩人の高みで何を夢見ているのです？
満員の小屋が貴君にも嬉しいのはどうした訳なのですか？
御得意様を近くから拝んで御覧！
その半分は冷淡で、その半分は野蛮ですね。
芝居遊びのあとで骨牌(カルタ)遊びがしたいと思っているのもある、
浮気女の胸に寄って荒っぽい一夜を過ごそうというのもある。
可哀そうなわからず屋さん、こうした目的のために、
優しいムーザの神々を色々煩わすがものはありますか？
悪いことは云わない、たっぷりと、何処何処までもたっぷりと、御馳走するのですな、
そうすりゃ目的(めあて)の外れっこなした。
人間の眼をぐらぐらさせるようにするのが肝腎ですぜ、
どうせ満足させるのはむずかしいから----
おや、どうしたのですか。感奮したのですか、せつないのですか。

詩 人

他処へ行って、君のために別の奴隷を捜したまえ！
詩人は自然が彼に授けた最高の権利を、
人であるという権利を、君のために、
勿体なくも仮そめに捨てなければならないのかい！
何によって彼はあらゆる人の心を動かすのだ？
何によって彼は四大の何物にも打ち勝つのだ？
それは階調というものではないのか、それが胸から押し出して来て、
彼の心臓の中に世界を手繰り寄せ、取り戻すのではないのか？
自然が限りなき長さの糸を

心なく撚(よ)りながら紡錘(つむ)に巻きあげるとき、
ありとしある物の階和なき夥(おびただ)しさが
厭わしくもわいだめなき響きを交えるとき----
そのとき誰がこの何処(いずく)までも単調に流れ行く列(つら)を
生かしつつ区切って、それを節奏(ふし)なして靈動させるのだ？
誰が個々物を俱会(ぐえ)の淨福に呼んで
それにいみじき協和音を出させるようにするのだ？
誰が暴風(あらし)のすさびを熱情の響きとするのだ？
夕焼けの紅を深沈な思いに燃えさせるのだ？
誰がありとある美わしき春花を
恋人達の踏む路に撒き散らすのだ？
誰が目立たぬ緑の葉を編み合わせて
あらゆる性(さが)の勲功(いさおし)の誉れの冠とはするのだ？
誰がオリュムプを揺るがぬものとなし、神々を和衷(わちゅう)させるのだ？
詩人に宿り現れる人間の力こそそれだ。

道 化 方

ではその結構な力を使って、
詩人の商売をやったら好いでしょう、
丁度恋の冒険をやるように。
ひょっこり近づき合って、味な気がして、立ち留まって、
それから段々からみ合って来る。
嬉しさが増す、それから邪魔がはいる、
夢中になると思うと、いつか痛みがやって来る、
そうしておやと思う間もなく、もう小説が出来上がっているのです。
私達もそういう芝居をやろうじゃありませんか！
ただたっぷりした人間生活の真ん中に手をつっこみなさい！
誰でもそうして生きている、それを知っている者はたんといない、
貴君がぎゅっと掴みさえすりゃあ、それが面白いものになるのです。
多彩な姿をはっきり澄まさず、
多くの誤謬に一点ちょっぴり光る真理----
これで最上の飲料(のみもの)が醸されて、
それが全世界を生き返らせたり力づけたりするのです。
其処で若い者のよりぬきの花が
貴君の芝居の前に集(つど)い寄って天啓に耳を傾ける、
其処で繊細な心は誰でも
貴君の作から哀愁の滋味を吸う、
其処でこの思いもあの思いもそそり立てられる、
銘々誰でも自分の心の中に持っているものを見つけるのです。
この手合いはまだまだ泣くにも笑うにも用意がある、
高鳴るものを尚(たっと)んで、仮象に喜びを持っている----
出来上がった者には取り入りようがない、
出来つつある者はいつでも有難がるでしょう。

詩 人

では私にあの時代を返して下さい----
自分も出来つつあった時代を。
競い押しあう歌の泉が
断簡もなく新しく湧き継いだ時代を。
峡霧が世界を包んで見せて、
蕾が奇蹟を予約した時代を。

谷という谷を豊かに充たして、
千々(ちち)に咲く花を摘んだ時代を。
私は何も持たなかった、それでも十分足りていた、
真への衝動も幻華の喜びも持っていた。
どうぞ不羈のままにあの衝動を、
あの深い・悩みに充ちた幸福を、
憎悪の力と愛の威力を----
私の青春を返して下さい。

道 化 方

善き友よ、君に青春が必要なのは、どの道、こういう時でしょう----
戦場で敵が君を追いつめるとき。
君の頸に、力一杯、
可哀い娘が縋りつくとき。
競争勝利の栄冠が、遙か彼方に、
獲難い目標(めあて)から目配せするとき。
激しく渦巻く旋舞のあとで
幾夜の酒宴を飲みあかすとき。
けれども手慣れの絃の調べに
雄々しく優しく手を下しつつ、
自分で立てた的を目ざして、
迂路も嬉しく逍遙(さまよ)い行くのが、
老練の士よ、それが貴君方の義務なのです、
我々の尊敬は決してそれで減りはありません。
老いては子供じみたものになる、というのは嘘です、
老いが来ても我々は本当の子供でいるのです。

座 方

言葉の遣り取りはもう沢山です、
そろそろ実行を見せてお貰い申したい！
御両君が念入りの御挨拶を交わしてられる隙に
実効のあることが出来上がらぬものでもあるまい。
気分のことを彼此論ずるのが何になります？
愚図々々している人には気分なんかやって来はせぬ。
貴君方が苟(いやしく)も詩人を以て任じてられるんなら、
詩に号令して御覧なさい。
私達に必要なものは先刻御存じだ、
私達は強い酒がすすりたいのです。
さあ早速醸造に取り掛かって貰いましょう！
今日されぬものは明日だって出来はしません。
人は一日も空過ごしてはいけないのです。
出来る筈のものの頭顱(つむじ)の毛は、すぐにも
決心が勇敢に掴まなければいけません。
決心は掴んだら放しはしないでしょ。う。
歩武を益々進めるでしょう、そうせずにはいられないのだから。
貴君は御存じだ、我が独逸の舞台では
誰でも仕たい放題のことを試みている。
だから今日のところ常背景も機械仕掛けも
何でも御遠慮には及びません。
大天光も小天光も御使いなさい、
星もふんだんに用いて構いません。

水も火焰も岩組も
獣でも鳥でも御遠慮には及びません。
この狭い板組の小屋の中で
構わず造化の全圏を闊歩し尽くし、
速度を測って動き廻って下さい、
天からこの世を抜けて地獄までも。

天上の序曲

主。天軍の群れ。後にメフィストーフエレス。
三人の大天使進み出づ。

ラファエル

日輪は昔ながらの響きに
同胞(はらから)なる天界と歌を競い、
よさされしその旅路を
雷(いかづち)の歩みもて全ったくす。
それを観れば天使力づく
極むるは誰人も力及ばねども。
思議を超えていと高き御業こそ
創造の日のままだに巖(いつく)しけれ。

カブリエル

さて速やかに、思議を超えて速やかに、
まぐわしき大地ぞ廻り廻る。
樂園なす明るさは深き夜の
怖ろしき夜と往きつ来つ、
大海は広潮なして、底深き
巖(いわお)に(たぎ)ち沸きかえり、
その巖も大海も、とわに速き
天界の軌道(みち)にひきぞゆかるる。

ミカエル

さて疾風(はやち)は競いつつ、海より陸(くが)へ、
陸より海へ、すさび吹き、
荒れ狂いつつ、鎖なすいと深き作用(はたらき)をぞ
めぐりには作り出づる。
ともすれば閃き落つる禍(まが)つ火
雷霆(らいてい)の路の行く手にきらめき立つ----
されど主よ、君が常昼(とこひる)の穩(おだ)しき歩みをこそ
御使(みつかい)達は崇(あが)めまつれ。

三人にて

観るままだに天使力づく、
君を極むるは誰人も力に及ばねども。
さて君がいと高き御業のすべてこそ
創造の日のままだに巖(いつく)しけれ。

メフィストーフエレス

お旦那、貴君が又見えられて、
こちとらのところで万事どう行っているか、御質ねなさる。
それに貴君は普段いつも喜んで私に御逢い下さったので、
御覧の通り御家来の中に私も罷(まか)り出ました。
御覧なさい、私は高尚ぶった言葉は使えやしません、

一座の者がみんな私をさげすむにしろ、どうにもなりませんや。
私が熱に浮かされたようなことを云ったら、貴君は屹度お笑いなさるでしょう、
尤も笑いをお忘れなすったんなら格別ですがね。
太陽だの宇宙だののことは、知らないから何も云えません。
私の眼につくものは、ただ、人間がどんなに悩んでいるかということばかりでさあ。
此の世のちっちゃな神様と来たら、いつまでたっても同じ拵えで、
それこそ創造の日のままに奇的烈(きてれつ)ですよ。
貴君が天の光の影を奴等に遣るような真似をなさらなかったら、
人間もちっとはましの暮らしが出来たんでしょうがね。
奴等はそれを理性と呼んで、その使い途と来ては、
ただどの獣よりももっと獣臭く振る舞う用にするばかりなのです。
檀那様の御免を被って申して見ようなら、
奴等は脚の長い飛蝗(ばった)のように私には思われますね、
いつでも飛ぼうとして、飛ぶ気で跳ねて
すぐに草中に落ちては昔ながらの唄を歌う、あれですな。
せめていつまでも草の中にてくれたらまだしもなのに！
奴、泥溝(どぶ)という泥溝に鼻をつっこむと来てやがる。

主

お前がわしに云うことはそれだけか？
お前はいつでもただ苦情ばかり云いに来るのか？
地上のことは悉く、お前には永劫に気に入らないのか？

メフィストーフェレス

気に入りませんね、旦那！彼処のことは相も変わらず心底から悪いと思えますね。
悲惨な日を見ている人間どもは私の気を腐らせますね。
この私でさえあの可哀そうな奴等を痛めつけるのがいやになりますね。

主

お前はファウストを知っているか。

メフィストーフェレス

あの博士ですかい。

主

わしの僕だ！

メフィストーフェレス

全くだ！彼は特別な流儀で貴君に仕えていますな。
あの馬鹿者の飲み物も食べ物も、地上のものではありませんな。
沸き立つ心があれを遠くの方へ駆り立てている、
自分でも自分の気違いが半分わかっているのでしょう。
彼が天に要求するものは最も美しい星だ。
地に求めるものはありとある最上の快樂(けらく)だ----
そうして近いものも遠いものもみんな、
底から騒立(さわだ)っている胸を満足させはしないのですね。

主

彼は今こそただ混沌としてわしに仕えているが、
わしは間もなくあれを明澄の境へ導き入れるであらう。
庭作り師でも、若木が緑するとき、
花と果が来る年々を飾ることを知っているではないか。

メフィストーフェレス

貴君は何を賭けなさる？貴君は結局あの男を奪われますぜ、
若しも貴君が私に、あの男をつらまえてそろりそろりと
私の道を引き廻すことを御許し下さるなら！

主

彼が地上に生きている間は、
その間はそれも禁(と)めはしない。
努力している間は、人間は迷うものだ。

メフィストーフェレス

それは有難い仕合ですな。一体死人なんぞを
好きでいじくったことは、私は一度もありはせなんだ。
私が一等好きなのは、たっぷりした・みずみずしい頬っぺただ。
死骸などには私は留守を使ってやります。
私の流儀は、鼠を見る猫というところですね。

主

よかろう、それはお前に任して置く！
彼の霊をその本領からひき離して、
お前にあれが掴まれるようなら、あの男を墮落させて
一緒にお前の路を連れて行って見い。
そうして恥じ入るがよいぞ、こう白状せねばならぬことになったら----
善人は、よしや暗黒な衝迫(うながし)の中にも
正しい道をばきっと承知しているものだ。

メフィストーフェレス

そうでしょうとも！ただそれは長続きがしないのです。
私には賭に負ける心配なんかでありませんな。
私が目的を果たしたときには、
胸一杯の凱歌を揚げることを許して下さい。
彼に塵埃(ちりあくた)を、而も旨(うま)がって、喰わせませず、
私の叔母の、有名な蛇のように。

主

その時もお前は遠慮なく振る舞って宜しい、
わしはお前の仲間を一度も憎んだことはない。
一切の否定する霊どものうちで
わしが一等荷厄介にしないのは悪戯者だ。
人間の活動はあまりにも弛みがちだ、
彼はすぐにも無条件に休息したが、
それだからわしはわざと彼に仲間をつけて置いて
それがつついたりひねったり、悪魔として創造しなくてはならないようにするのだ。
だがお前達、本当の神の子どもは、
このいきいきと、豊かな美しさを喜ぶがよい！
生成して過(や)まず、永遠に働き生きるものに、
愛の優しき絆を以て囲まれ、蕩揺(とうよう)する現象の中に漂うものを、
持続する思想を以て繋ぎ留めるがよい。
(天閉じ、大天使達互いに立ち離れる)

メフィストーフェレス (独白)

俺は時々あのお爺さんを見るのが好きだ、
そこで彼と仲違いをせぬように気をつけている。

大旦那としては全く感心なことさ、
あんなに人間らしく、悪魔そのものとさえ口をきくのは。

悲劇 第一部

夜

円天井高く、狭くるしきゴシック風の部屋にて、
ファウスト落ち着きなく、机の前なる自らの椅子に座しいる。

ファウスト

ああ、今が今まで、哲学も、
法学も、医学も、
口惜しいことには神学まで、
熱心籠めて辛苦して、残る限なく研究した。
そうして此処にこうしている、可哀そうな馬鹿の俺だわい！
おまけに昔よりちっとも利口になって居ないと来る。
マギスターでそろの、ドクターでそろのと名乗って、
かれこれ十年ばかりというもの
上げたり下げたり、横にしたりひん曲げたり、
鼻を抓(つま)んで学生を引きずり廻しているのに----
結局、我々にはなんにも知り得んということだけがわかろうとは！
これを思うとまるで心臓が焼かれるようだ。
ドクターだ、マギスターだ、物識りだ、坊主だというような
思い上がった馬鹿者どもに較べれば、勿論俺の方が聡明ではある、
物怖(ものお)じも疑惑も俺を悩ましはしない、
地獄も悪魔も俺を嚇(おど)かしはせん----
その代わり、どんな歓喜もみんな俺から奪われてしまった。
然るべきことを知っているという自惚れもなく、
人間を導いたり改心させたりするような
一廉(ひとかど)のことを教え得るという自惚れもない。
おまけに、俺には財産もなく金もなく
名誉もなければ此の世の栄耀もない。
犬だってこんなにしちゃあ生きてはいかれまいて！
其処で俺は身を魔法に委ねた----
精霊の力と言葉とによって
いろいろの秘密が啓示されはすまいか、
もう、酸っぱい汗を流してうぬが知らぬことを言わずに済むようになりたい、
世界をその奥で統べているもの、
それは何かを認識したい、
一切の作用力と種子(しゅうじ)を観たい、
そうしてもう言葉の小売りを罷めにしたい、と。

まどかなる月影よ、ああ、御前が
俺の痛苦を見卸すのもこれが最後であれば好いに。
俺は幾夜さの真夜中を眠らずに
この机に凭(もた)ってお前を待ち得たのだった----
真悲(まがな)しき友よ、そのときお前は
色々の書物や文書の上に照っていたね！
ああ！俺が高山の嶺の上を
お前の懐かしい光の中で歩むことが出来たらなあ、
そうして霊たちと共に山中の洞窟をめぐって飛行(ひぎょう)したり、
草野の上をお前のおぼめく光の中で逍遥(さまよ)ったり、
あらゆる知欲の毒気を超脱して

すくよかにお前の露を身に浴びることが出来たらなあ！

あゝあゝ！俺はまだこの牢屋にちじかんでいるのか？
呪われた・鬱陶しい壁穴奴、
此処へは、懐かしい天上の光さえ
濁って、色硝子越しに差し込むのだ。
此処は、虫に触られ・塵に覆われ・
堆(うずたか)く積み上げられた・こうした書冊に狭められて、
高い天井に届くまでに、
一いろの煤けた文書が四壁を埋め尽くす、
様々の壇(びん)や罐(かん)がぐるりに並べ立てられ、
色々の器械がぎっしり詰め込まれ、
祖父(じじい)ども伝来の家具が押し込まれている----
これが貴様の世界なのだ！これが一つの世界だとよ！

貴様はこれでも訝(いぶか)る気か、なぜ貴様の心臓が
貴様の胸の中で悩みかじかんでいるかを？
なぜえたいの知れぬ苦しみか
あらゆる生の発動を碍(さまた)げるのかを！
神が人間を造り込んで呉れた
生きた自然をよそにして、
煤と黴との中で貴様を取り巻くものは
ただ鳥獣の骨、死人の骸骨ばかりじゃないか。

さあ、逃げろ！起て！広い世界へ出ろ！
そうして此処にある深秘の書、
ノストラダムス
が自分で書いたもの、
これがお前の道連れには十分じゃないか？
そのとき星の運行が悟れるだろう、
そうして自然が御前を指導するとき、
そのとき、御前の魂の力が醒めて、
霊が如何に他の霊に語るかがわかるだろう。
此処で、乾燥な知解(ちげ)で、
神聖な符を釈(と)き明らめようとするのは無駄だ----
お前達霊どもよ、お前達は俺の近くに漂っているな、
俺の声が聞こえるなら、返事をしてくれい！
(彼その書を開いて大宇宙の符を観る)
や！これを見ると、何という歓喜が
忽ちに俺のあらゆる官能に漲(みなぎ)ることだ！
俺は若い・浄(きよ)らかな・生の幸福が
新たに燃え立って神経や脈管を貫いて走るのを感じずる。
この符を書いたのは神ではあるまいか？
これこそ内面の騷擾(そうじょう)を鎮めて、
この不便(ふびん)な心臓を歓喜に充たしめ、
そうして深秘な促しを以て
俺を取り巻く自然の諸力を啓(ひら)いて見せるものだ。
俺が神ではあるまいか？ひどく心が明るくなる！
この符の清浄な画(かく)を見てみると、
能産の自然が魂の前に現れるようだ。
今にして始めて領得するは、あの賢者の言葉だ----
「諸霊の世界は鎖されたるにあらず、
汝の官能塞(と)じ、汝の心胸死せり！

起て、学徒、精進して倦むことなく
塵芥の胸を暁天の紅に浴びせしめよ！」

(彼、符を諦観す)

如何に一切が互いに織り成して全体となり、
一は他の中に入って働き且つ生きることだろう！
如何に天の諸力が昇り且つ降って
黄金の釣り鐘を渡し合うことだろう！
祝福の薫りを蒔く蕩揺(とうよう)を以て
天から出て地を貫いて到らぬ限なく、
みな階調をなして万有を貫いて響くことだろう！
何という観物だろう！併しああ！観物たるに過ぎぬ。
無辺の自然よ、お前の何処を攫(つか)めばいいのだ？
汝等乳房だち、一体何処を？汝等生の泉よ、
天も地もこれに懸かり、
萎えたる胸のあこがれ迫るものよ----
お前達は湧き、お前達は飲ませている。

それなのに俺はこんなに空しくやつれ焦がれるのか？

(不機嫌に書を翻して地霊の符を観る)

この符の俺に及ぼす力は何という違いだ！
おい、地の霊、お前の方が余程俺に近い。
もう俺の力が高まって来ることを感ずる。
もう新しい酒に酔ったように身がほてって来る。
俺は勇気を身に覚える----身を敢えて世間に投じ、
地上の惨苦をも地上の幸福をも自ら担い、
暴風と共にあばれ廻り、
破船のきしみの中にあっても逡巡はせぬ。
俺の頭の上に雲が湧くな----
月が光を隠すな----
燈が消えるな----
靄(もや)が立つな！----赤い光がちかちかと
俺の頭の周りに閃く----雨気が
天井から吹き落ちて来て
俺に襲いかかるな！
身に沁みるぞ。お前は俺の周りに漂っているな。願力応現の霊よ。
姿を現せ！
はあ！俺の心臓のひきつきようは！
新しい感じとなって
あらゆる俺の官能が沸き返るぞ！
俺の心はすっかりお前に委ねたような気持ちだ！
是非とも出ろ！是非とも出ろ！俺の命を取られてもいい！

(彼は書を手にして、地霊の呪いを窃深に誦す。赤き焰閃き、霊、火焰の中に現る)

霊

俺に呼びかけるのは誰だ？

ファウスト (身を背く)

恐ろしい姿だな！

霊

お前は力一杯に俺をひき寄せ、
長い間俺の境界に吸引の力を逞しくした、
ところがどうだ----

ファウスト

ああ！俺はお前に堪えられない！

霊

お前は、と息を衝きながら目のあたり俺を見たいと願う、
俺の声を聞き、俺の顔を見ようと願う。
お前の力一杯の魂の願いが俺の心を動かす、
其処で俺は此処に居る！----何というみじめな恐怖が
超人のお前を掴んでいるのだ！お前の魂の叫びは何処にある？
あの胸は何処にある、一つの世界を身の内に造って、
それを担い、培(つちこ)うた胸----歓喜の身震いを以て、
俺達霊どもと同じ高みに昇ろうと張りきった胸は？
お前は何処にいる、ファウスト？お前の声は俺に響いたのに
お前はあらん限りの力で俺に薄(うす)ったのに。
俺の氣息(いき)に立ち籠められて、
命のあらゆる底から慄(ふる)えているお前があの男か、
怕(こわ)がって縮かまって逃げ出そうとする虫があの男か？

ファウスト

焰より成れる姿よ、なんの俺がお前の前にたじろいでよいものか？
俺だ。ファウストだ。お前の仲間だ！

霊

生の流れの中に、事業の暴風(あらし)の中に、
沸き昇り、沸き沈み、
彼方へ奔(は)せ、此方へ奔す！
生誕と墓穴と
とこしえの大海、
往き交う梭箴(ひおさ)
灼(かがや)く生命(いのち)----
かくて時というもののさわ立つ機(はた)に俺はいそしみ、
大神の生きた衣を織る。

ファウスト

広い世界を彷徨(さまよ)い廻るお前、
忙(せわ)しい霊よ、俺はお前をどんなにか親(ちか)しく感じているぞ！

霊

お前は、お前の理解する霊にこそ似て居る、
俺には似て居らん。(消ゆ)

ファウスト(倒れかかりながら)

お前には似て居らん？
では誰に似て居る？
俺だ、神というもののまことの似姿だ！
それがお前にさえ似て居らんのか！
(扉を叩く音す)
おお、死だ！わかっている----あれは俺の助手だ----
俺の最もすばらしい幸福が駄目になる。
これほど満ち満ちている顕現を
あの乾燥無味な・足音を偷(ぬす)んで歩く男が妨げなければならぬとは！
(ヴァークナー、寝衣を着、寝帽を被り、一燈を手に取りて登場。
ファウスト不機嫌に振り向く)。

ヴァークナー

御免なさいまし！貴君の朗唱なさるのが聞こえました。
定めて希臘の悲劇をお読みになったのでございましょうね。
その技術のことで私も何か益を得たいと存じます、
当節はそれが大変役に立つのでございますから。
私は度々こういう褒め言葉を耳に致しましたが、
俳優は牧師の先生になることも出来よう、ということでございますね。

ファウスト

牧師が俳優ならそうもあろう。
全く折々はそういうこともあるかも知れんよ。

ヴァークナー

ああ！人がその研究室に閉じ込められていて、
世間を見るのは、やっと休日に、
而も遠眼鏡を通して唯遠くからだけ、というような場合、
どうしたら世間を言葉で説き伏せてこれを導いて行くように参るでしょう。

ファウスト

若し君がそれを感じていないんなら、旨くそれを攫(つか)み取りにすることは
出来まいね----
それが魂から押し出して来て、
真底から力のある面白さで
あらゆる聴衆の心を締め付けないんなら。
君がいつまでもただ座っていて見たまえ！膠(にかわ)でもくっつけたり、
他(ひと)の御馳走のお余りで骨董羹(ごっちゃん)を煮たり、
君のちっぽけな灰だまりから
けちな火を吹き起こしたりしていたまえ！
子供や猿なら感嘆もしよう、
それが君の口にあうならそれまでさ----
併し君はとても心を心に牽き寄せることは出来まいぜ、
若しそれが君の心から出るの でなかったら。

ヴァークナー

でも言い廻しは演説家を成功させるでしょう。
私もよくそれを感じて居ります、が、まだまだその域には及びもつきません。

ファウスト

正直な成功を求めたまえ！
ちゃらちゃら鳴る鈴のような馬鹿になり給うな！
頭と、まともな勘とさえあれば
技巧なんかなくとも自然と言い廻しがつく。
若し君の言おうとすることが本気なら、
言葉などを探している必要が何処にある？
そうだ、君達の演説は、あんなにちかちか光っていても、
紙花を縮(ちじ)らして人生にくっつけるようなもので、
秋になって乾反葉(ひぞりば)の間をざわめき渡る
霧風のように気持ちが悪い。

ヴァークナー

どうしましょう！芸術は長し！
そうして私どもの命は短いのでございますよ。

私は、批判的研究に努めて居りますと、
時々頭も胸も重く苦しくなって参ります。
それに頼って源泉に遡り行くべき
手段を獲得することは何というむずかしさでしょう！
そうしてやっと半途まで漕ぎ付ける前に、
可哀そうな悪魔は恐らく死なねばならぬのでございます。

ファウスト

古文書なんぞ、それが神聖な泉で、
それを一口飲むと永遠に渇が鎮められるとでもいうのかい？
潑刺の力は君の身につきはしない、
それが君その人の魂の中から湧くのでなければ。

ヴァークナー

御免なさい！それは大した楽しみでございますよ----
時代時代の精神の中に我が身を置き換えるということは。
我々の前に賢者がどう考えたか、それを承けて
我々が到頭どんなに素晴らしく進歩させたか、それを見ることも。

ファウスト

全くだね、遠く星にも届くまでの進歩さ！
我が友よ、過去のもろもろの時代は
我々にとっては七つの封印を施した一卷だ。
諸君が時代の精神と呼ぶものも
それは結局先生その人の精神で、
その中にもろもろの時代が投影するのだ。
そんなわけで、実際、時々随分みじめなことがある！
人は一目見て諸君から逃げ出してしまうのだ。
塵埃溜(ごみため)か、がらくた部屋か、
高々、こけ嚇(おどか)しの大事件を持ち込んだ芝居で、
それに傀儡(でく)の口にふさわしい
結構な実用向きの格言を添えてあるぐらいのところだ。

ヴァークナー

でも世界はどうです！人間の心と精神とは！
誰でも少しはそれを認識したく思いやしませんかしら。

ファウスト

そうだ、人がそれで認識のつもりでいるもののことなら！
誰か生まれた子を本当の名で呼ぶことを許されよう！
僅かの人達が、少しはそれを認識した。
愚かにも彼等の満ち満ちた心を隠して置かずに、
その感じ、その諦観を賤民に啓いて見せたその人達を、
世間は昔から、十字架に磔(はりつ)けたり焚き殺したりして来たのだ。
友よ、許してくれ、もう夜も更けた、
今夜はこれで話をやめなければならぬ。

ヴァークナー

私は喜んでいつまでも起きていて、
先生とこんな風に学問の話を致したいのでございますが。
でも明日、復活祭の初めの日に、
又一个二つ質問を御許しいただきましよう。
熱心に私は勉学に努めてまいりました、

実際大分物識りになって居りますが、私はあらゆることを知りたく存じます。(退場)

ファウスト(一人にて)

あの男にあらゆる望みが消え失せてしまわないのは、いやはや、どうしたことだ、
いつまでもいつまでも味もそっけもないことにへばりついていて、
食欲の手で宝を掘りあてようとしながら、
蜥蜴(とかげ)を掴んでは喜んでいやがる！
あんな人間声が此处に----満々(みちみち)たる
精霊の気が俺を取り巻いていたところに、響いて好いものか？
けれども、ああ！この度こそ俺はお前に御礼をいうぞ、
ありとある地上の子のうちでも最も憐れな奴に。
お前は絶望の境から俺をひっぱり出して呉れた、
それは俺の覚知を悉く破壊し去るところだったのに。
ああ！あの顕現が巨人のようにひどく大きかったので、
俺は全く身を侏儒のように感ぜずにはいられなかった。

俺は、神というものの真(まこと)の似姿は、もう
永遠なる真理の鏡にまるで迫り得たものと自惚れて、
天の光耀と明澄との中に己れ自らの身を楽しみつつ、
地上の子を脱ぎ棄てていた。
俺は、火焰天使以上、無礙自在の力を以て
既に自然の脈々を貫いて流通し、
創造しつつ神々の生を享けようと
予感に満ちて思いあがっていた。ところがその俺のこの報いられようはどうだ！
雷霆の一語がすっかり俺を攫(さら)ってしまった。

身丈をお前に較べようと自惚れるのは、俺に許されたことではない----
俺はお前を引き寄せて、掴むだけの力は持っている、
併しお前を引き留めて置く力が俺にはなかった。
あの恵まれた瞬間に
俺は此の身をどんなにか小さく、又どんなにか偉きく感じたろう。
人間の不慥かな運命の圏内に
お前は惨酷にも俺を衝き戻した。
誰が俺を教えて呉れよう？何を俺は避くべきだろう？
俺はあの衝動に従って行くが好いのか？
ああ！我々の承ける苦だけではなく、我々の事業そのものさえ、
我々の生の行く手を塞ぎ遮るのだ。

霊性が受け取った最も優れたものにさえ、
いろいろの異物が絶えず纏い寄って来る。
我々が此の世の善なるものに到達するとき、
そのとき更に善きものは虚偽迷妄と呼ばれる。
我々にとって生を生き甲斐あるものとする秀抜な感情は
塵界のどよみの中にあって凝り固まってしまう。

常には果敢な翱翔(こうしょう)を擅(ほしいまま)にして、
希望に満ちつつ永遠の境へ広がり行く空想も、
今やささやかな空間に足らい甘んずる----
幸福は幸福を追うて相踵(つ)いで時潮の渦巻きの中に覆没するとき。
憂いは直ちに心の底深く巣くい、
其処に密かなる痛みを蒔いて、
安気(やすげ)なく身をゆすり、悦びをも静けさをも礙(さまた)げてしまう。
それは間断なく新たなる仮面のもとに隠れ、

家となり屋敷となり、妻となり子となり、
火、水、剣及び毒液となって、自在にその姿を現ずる。
お前は起こりもせぬことのために常に慄えわななき、
失いもせぬものをいつでも哭(こく)せなくてはならぬ。

神々には俺は似て居らぬ！この感じはあまりに痛切だ。
塵芥の底をもぐり行く虫にこそ俺は似て居る。
その虫が塵芥に身を肥やして命を繋ぐとき、
旅人の足がこれを踏み殺して埋めてしまうのだ。
百にもあまる仕切りから出来ていて、この高い壁を
狭苦しくしているもの、それも塵ではないか？
千様のがらくたでこの蠹魚(とぎょ)の世界の中に
俺を押し付けている古道具も亦同様ではないか？
此处で、俺は俺の求めているものを見付けなくてはならんというのか？
俺は千巻の書の中にこういうことを読み出さなくてはならんとでもいうのか、
人間は到る処自ら苦しめて来たことを、
ただ其処此处に一人ぐらいの幸福者があったことを。----
うつろな髑髏奴、なぜ貴様は俺の方を向いて齒を剥(む)くのだ？
貴様の脳髄も俺のと同じように、そのかみ迷いつつ
軽らかな日を求め、薄明の中に重苦しく、
真理を愛しながら、みじめに彷徨したというだけだろう。
貴様達器械どもも勿論俺を嘲(あざけ)っている、
その車輪や齒や、円筒や把柄(とって)----
俺は扉の前に立っていた、貴様達は鍵になって呉れるべき筈だった。
成程貴様達の鬚はちじくれている、併し貴様達は門(かんぬき)をあけて呉れはしない。
白日にも深く自ら晦(つごもり)して
自然にその薄紗(はくさ)を掲げさしては呉れぬ。
彼女がお前の心霊に啓示する気のないものは、
槓桿(てこ)でも螺旋(ねじ)でもこじあけることが出来ない。
貴様古家具奴、俺に用のない奴、
貴様が此处にいるのは、ただ、父が貴様を使った御陰なのだぞ。
貴様、古滑車奴、この机の傍に薄暗いランプが
くすばっている限り、貴様は煤けて行くのだ。
このちっとばかりのものは、一そ売り飛ばした方が遙かに好かったに、
こんなちっとばかりのものを背負い込んで、俺は此处で汗をかいている！
お前が先祖から相続したものは、
それを占有する気なら、労してそれを取得するが好い。
利用せぬものは一つの重荷だ、
刹那が造ったものでなくては、人はそれを利用することが出来ぬ。

はてな、なぜ俺の目はあすこのあの場処にくっついて離れないのだろう？
其処にあるあの小罎(こびん)は眼にとっての磁石なのか？
なぜ俺の心は、忽ち愛(めで)たく明るくなって来たのだ？
夜の森を行く我等に、月影が差し添うて来たかのように。

会釈するぞよ、無二のふらすこ！
今、恭(うやうや)しくお前を取り卸しながら。
お前あればこそ、俺は人間の智巧にも技術にも敬礼する。
お前、恵みあるまどろみの液の萃美(すいび)、
お前、死を贍(もたら)すあらゆる微妙なる力の精髓、
お前の籠(ちょう)をお前の主人に垂れてくれい！
お前を見ると、痛みが和(なご)やかになる、
お前を取ると、張り詰めた心が緩んで来る、

霊の潮(うしお)の流れ、やゝにやゝに引いて行く。
大海原の沖遙かに俺は送り出される、
鏡なす潮は我が足下に輝く、
新たなる日は新たなる岸へ誘う。

一両の火焰の車が軽らかに揺れながら空に浮かんで来る、
この俺を迎えに！俺は心支度が出来ていることを感ずる----
新しき道の上を瀬気(こうき)を劈(つんざ)き進んで、
純なる活動の新たなる境涯へ。
こんな高邁な生活、こんな神々に似た歓喜！
お前はまだ蛆虫(うじむし)なのに、お前に何の功があってそれを享けるのか？
好い。ただ、恵みある地上の太陽に
決然としてお前の背を向けるが好い！
誰でもその前を擦り抜けて通りたがる
あの門扉を不敵に押し開けて行け。
今こそその時だ----男児の威厳が
神々の位を怖れぬことを、行為によって示せ。
空想が我と我が身をその中に投げ入れて自ら苦悩する
あの晦冥(かいめい)な洞窟の前にも戦(わなな)き慄えず、
その狭い脰(あざと)を繞(まと)って全地獄の炎が燃え立つ
あの隘路を目ざして進め。
この一步に向かって、心晴れやかに思い定めよ----
よしや流れ去って虚無の中に姿を消す虞(おそれ)があろうとも。

さあ降りて来い、水晶の浄(きよ)らかな盃！
お前の古い匣(はこ)の中から出て貰おう、
俺は長い年月お前を忘れていた！
父祖が祝宴を張ったときに、お前は耀いた。
一人が一人へお前を差したときには、
真面目腐った客の顔をお前は晴れやかにしたものだった。
多くの絵模様の技巧豊かな華飾、
それを韻語で説明して、一息を以て
中をあげなければならぬ飲み手の義務、
それは若い時分の数々の夜を俺に思い出させる。
俺は今お前を隣へも廻さず、
お前の精巧に対して俺の才を示そうともせぬ。
此処に一つの液がある、それは速やかに人を酔わせる奴だ。
なみなみとした褐色で、それはお前の凹みを満たす。
俺が醸して、俺が選んだ液だ。
この最後の盃を、さあ、全心を籠めて、
祝宴らしい晴れの会釈として、暁のために捧げよう！
(彼、盃を口につく)
鐘の響きと合唱歌。

天使の合唱

基督よみがえり給いぬ！
死ぬべき者等に喜びあれ、
滅びをば運びつつ、
忍び来る、世々継げる
罪を負うその人々。

ファウスト

何という深い唸り、何という澄んだ音色が

強いて俺の口から、盃を離させることだろう？
お前達あの朧ろな鐘の音は、もう
復活祭の始まりの時を知らせるのか？
お前達合唱の群れは、もうあの慰藉(なぐさめ)の歌を唱うのか、
そのかみ塚穴の夜をめぐり、天使の唇から響いて、
新しき誓約を確かめたあの歌を？

女たちの合唱

香料もて
我等み体を塗りまつり、
我等、主にまつろえる者、
み体を臥させまつりぬ。
布紐(きれひも)も清らかに
我等裏(つつ)みまつりぬ。
あなや！さるを此処に
主の見えまさぬ。

天使の合唱

基督よみがえり給いぬ！
愛ある君よ、聖にいませ、
悩みいみじく、
癒やし、又鍛い鍊る
試練(こころみ)を修(しゅ)し卒えたまえる君。

ファウスト

お前達天上の響きよ、お前達は、威(いつ)重く又優しく、
なぜ俺をこの塵の中に求めるのだ？
心軟らかな人達のいる、彼処に響き渡れば好いに。
なるほど福音は俺にもきこえる、併し俺には信仰が欠けている。
奇蹟は信仰の最愛の子だ。
其処から恵み深き便(たより)の響いて来るあの境へ
努力を向けることを俺は敢えてせぬ。
とはいえ少年の時からあの響きに馴れていたもので、
それは今も亦俺を生へ喚び返すのだ。
昔は安息日の厳かな静けさの中で
天愛の接吻が俺の上に降り灑(そそ)いだものだった。
その時、豊かに充ちた鐘の音が如何にも意味深げに響いて、
祈りは盛り上がって来る受用だった。
一つの何とも云えず甘美な憧憬が
俺を駆り立て、森を越え野を越えて俺を彷徨わせた。
そうして千行の熱い涙と共に
俺は一つの世界が俺のために湧出することを感じたものだった。
この歌は、若い者に、心のはずむ遊び、
春祭の思うままなる幸福を宣べ伝えたものだった。
追憶は今、子供らしい感情を以て、
最後の・仮初ならぬ一歩から俺を引き戻す。
おお、響き続けてくれ、お前達甘い天上の歌よ！
涙が湧き出す、大地は俺を取り戻した！

使徒達の合唱

埋められ給いにし人、
はや御空高く、
生きつつ気高き人、

厳かに昇らせたまいぬ。
成り変わる楽しみもて
造り成す喜びに近づかせ給う。
あわれ！地の胸にもたれつつ、
悩むため、我等世にぞある。
主はその僕、身を焦がす我等を
此処に残し置きたまいつ。
あわれ、我等は泣く、
師よ、君が幸(さち)に！

天使の合唱

基督よみがえり給いぬ、
巧壊(くえ)の懷を出でて。
汝達(なんだち)、絆(きずな)より
勇みて身を脱れよ！
行いつつ主を称(とな)え、
実(まこと)もて愛を見せ、
同胞(はらから)さび食をわけ、
道を説く旅を行き、
来む歓喜(よろこび)告ぐる者、
汝達に師は近し、
汝がために師ぞいます！